

<実践報告・調査報告>

## 学業不振学生に対する修学支援の事例検討 —出席促進に焦点を当てて—

垂門 伸幸<sup>1</sup>

近年の多様な学生の入学に伴い、学業不振学生に対する支援が大学における課題の一つとなっている。これまで大学生に対する修学支援の理論は提案されてきているが、具体的な支援策は十分には提示されていない。本稿では、学業不振学生の成績を改善するために、授業への出席行動に注目し、まず応用行動分析の観点から学業不振学生の出席が習慣化しないメカニズムを考察し、出席行動を促進する支援策を提案した。支援策の方向性として、出席行動に随伴して、支援を受ける者にとって望ましい結果を得られるように支援を計画すること、および、出席行動を抑制する方向に影響する思考や不安等の影響力を弱める関わりをすることを目指した。次に、その支援の方向性に沿って留年生に対して行った具体的支援事例を提示し、支援の効果を検討した。出席行動を促進するべく継続的に関わった結果、実際に出席行動が促進され、修得単位数・GPAが顕著に改善し、次学期の単位修得に向けた自信が上昇したことを報告した。

キーワード：学業不振学生、修学支援、出席行動、成績、応用行動分析

### 1. 背景と目的

少子化が進む中、「大学全入時代」と呼ばれるようになって久しい。それに関連して様々な変化が指摘されているのは周知のとおりである。その変化の一つに、多種多様な学生が入学するようになったことが挙げられる。

入試形態の多様化などもあいまって、「学力」や「意欲」の面においても学生のばらつきが大きくなっている。そのような中、大学運営の観点からは、とりわけ「低学力」「低意欲」の学生への対応が大きな課題の一つとなっているのは、全国の大学で同様の状況であると思われる。そのような学生たちは、大学の単位制度の中で、端的には学業不振の形で表れてくる。

筆者は修学支援の業務にあたる中で、主には面談という形で、学業不振の学生と関わってきた。彼らが学業不振に陥った理由は様々である(中本・垂門, 2015)。垂門(2015)は、授業への「出席率」が「GPA」に強い影響を与えていることを統計的に明らかにした。この結果は、学業不振の学生を支援する際、成績改善に向けて「出席」が有効な指標となる可能性を示唆している。

それでは、「出席」に焦点を当てた修学支援とは具体的にはどのようなものであろうか。これまで

修学支援に関連する領域では、支援についての様々な考え方が提案されているが、実際に現場で学生と接する支援者にとっては、考え方に加えて具体的な方法が示されなければ、支援策を実践することができない。また、具体的な方法が提案され是非が議論されることで、支援策がさらに改良されていくと考えられる。

そこで本稿では、「出席」に焦点を当てた学業不振学生に対する修学支援がどのように行われうるのか、理論的な枠組みを示した上で具体的事例を記述し、支援内容を検討することを目的とした。

### 2. 先行研究・先行の取組み

#### 2.1. 修学支援に関する研究／取組み

大学における修学支援の枠組みとしては、例えば文部科学省中央教育審議会答申(2012)で、学士課程教育の改善の手立ての一つとして紹介されている、「アカデミック・アドバイザー制度」がある。「アカデミック・アドバイザー制度」は米国でより普及しているようである。NACADA(The National Academic Advising Association)は、1979年に設立され、高等教育におけるアカデミック・アドバイザーング(Academic Advising)について、理論・研究・実践の発展・普及活動を行っ

<sup>1</sup> 京都産業大学 教学センター

ている (NACADA ウェブページより)。アカデミック・アドバイジングの対象学生像は、必ずしも明確ではないようだが、本稿で議論しているような学業不振学生も包含されると考えられる。

これまでアカデミック・アドバイジングの理論はいくつか提案されており、それぞれの理論を支持する立場によって強調点は異なる。こういった理論についての議論は長年行われている。近年では例えば、HIMES (2014) は、これまで提案されてきた理論を5つに整理し、これらを統合し、基準となる理論 (a normative theory) を構築する必要性を訴えた。

しかしながら、これらの理論を使用した実践報告は、管見では見当たらない。STROMMER (1994) は、これまで提案されている理論の一つである「Developmental Theories」は、アカデミック・アドバイジングの現場では、どのように適用すればいいのか不明であることや、あるいは、現場の感覚との乖離を指摘している。同様な問題意識として、CREAMER and CREAMER (1994) は、アカデミック・アドバイジングの領域では、実証的な研究がほとんどないと述べている。理論と実践の乖離は、「Developmental Theories」だけではなく、他の理論についても、同様の状況にあると推察される。

実践報告とまでは言えないが、米国のアカデミック・アドバイジングの実情を報告したものとして、富田 (2015) がある。富田は、あるベテランのアカデミック・アドバイザーにインタビューを実施し、彼女が担当した学生に対するアドバイジングの様子を聞き取った。アドバイザーは、数名の学生とのやり取りを回想して語っているが、アドバイジングを受けた学生がどのように変化していったかについてはほとんど言及はない。

日本においては、日本高等教育学会で研究や取組みが報告されている。日本高等教育学会第18回大会では、研究発表のテーマの一つとして「不適応学生」が挙げられ、4人の発表者より研究・分析の報告があった。内容は、修学支援の制度面からの考察、中退者についての統計的分析、親の学歴と学修行動の統計的分析であり、実践報告はなかった (日本高等教育学会第18回大会実行委員会, 2015)。

上述のように、修学支援における実践報告はあまりなされていないのが現状のようである。

## 2.2. 出席を扱った研究／取組み

出席は、データ収集が比較的容易であり、大学内規模や学部内規模で、出席と GPA・修得単位数

との関連 (小泉, 2008) や、出席と留年退学との関連 (伊藤ほか, 2014) が検討されている。

小泉 (2008) は、所属する学部で、定例会議で欠席の多い学生が報告されることになっており、そのために集計している出席データと成績 (GPA・修得単位数) との関連を検討し、欠席傾向が強いほど成績が悪いという結果を示した。また、こういった欠席がちな学生に対し、学科として担当教員を割り振り、電話連絡や呼び出した上での面談を実施していると報告している。面談内容は記録され、変化を捉えやすくする工夫をしていると紹介されているが、学生がどのように変化していったかについての言及はなかった。

出席を取り上げた大規模な統計的分析として、小方 (2008) は、東京大学が2007年に行った「全国大学生調査」の中間集計データから、1年生と3年生の約1万8千人の回答を分析した。「授業出席率」は、「学生のエンゲージメント」の一つと捉えられており、成績 (優の割合) を従属変数とした重回帰分析では、「家庭背景と入学前特性・学習動機」「学部の組織構造」「教育プログラム」に分類される他の変数と比較して、大きな影響力を示す結果となった。

以上のように、出席に注目した先行の研究・取組みでは、出席と成績や休学・退学との関連が指摘されており、出席率を指標として活用した支援の報告は見られるが、学生の出席行動に注目し、支援に伴った学生の変化を詳細に検討したものは管見では見当たらない。関連領域のこれまでの研究の流れを踏まえると、本報告は、修学支援の取組みを実践と関連づけて検討する点に、意義を有すると考えられる。

## 3. 支援の理論的基礎

### 3.1. 指標としての出席行動

「1. 背景と目的」でも触れたように、垂門 (2015) は、「出席率」が「GPA」に強い影響を与えていることを明らかにし、「出席率」を修学支援の指標とすることのメリットとして次の3点を挙げている。

- ①これまでの修学の取組みのアセスメントに有効である。
- ②授業期間中に当該学期の修学の取組みを振り返る際、即座にフィードバックされる具体的かつ客観的指標として有効である。
- ③具体的かつ客観的な指標であるため、本人を取り巻く関係者と状況を共有しやすい。

本稿では、②のメリットに注目し、単位修得を

改善させるために、学業不振学生の出席行動を促進することを第一の目標とした。

### 3.2. 出席行動の習慣化のメカニズム

出席行動のメカニズムを理解するには、応用行動分析 (applied behavior analysis) の考え方が有用であると考えられる。応用行動分析は、習慣的な行動がどのように形成されるかを理解する枠組みを提供する (大河内, 2007; 吉野, 2007; 杉山, 2005; 奥田, 2012 など)。

習慣的な行動 (Behavior) の形成のされ方について、応用行動分析では「行動が起こる前の刺激 (先行刺激: Antecedent) → 行動 (Behavior) → 結果 (Consequence)」のセットで行動の文脈を捉え、行動の主体にとって望ましい結果が得られれば、行動は促進されて習慣化し、反対に望ましくない結果が得られれば、抑制されて習慣化しない、と考えられている (大河内, 2007; 吉野, 2007; 杉山, 2005; 奥田, 2012; RAMNERO and TORNEKE, 2008 など)。

この枠組みを用いれば、まず、出席行動が習慣化している場合の文脈のセットは、次のように考えられる。

#### <パターン①>

- (A) 先行刺激 授業期間中、授業への出席が求められる状況
- (B) 行動 授業に出席する
- (C) 結果 新しい知識が増えて嬉しい / 友達に会えて嬉しい / 授業中に良い発表ができた など

これらの (C) 結果は行動の主体にとって望ましいものであるため、(B) 行動は増加し、習慣化する。

次に出席行動が習慣化していない場合の文脈のセットは、次の2つのパターンが考えられる。まず<パターン②>は、出席することで、望ましくない結果が得られる場合である。

#### <パターン②>

- (A) 先行刺激 授業期間中、授業への出席が求められる状況
- (B) 行動 授業に出席する
- (C) 結果 退屈と感じる / 授業内容が理解できず苦痛 / 通学過程の満員バスでヘトヘト / 授業中、的外れな質問をして恥をかいた など

これらの (C) 結果は、行動の主体にとって望ましいものではないため、(B) 行動は減少していく。この<パターン②>の場合の (C) 結果を、以後特に「出席抑制経験」と呼ぶ。

出席行動が習慣化していない2つ目のパターンは、学業以外の活動 (例えばゲーム) に傾倒している場合である。

#### <パターン③>

- (A) 先行刺激 学業以外に傾倒する領域がある
- (B) 行動 その領域の行動をする (例えばゲームをする)
- (C) 結果 楽しい / ワクワクする / 興奮する など

これらの (C) 結果は、行動の主体にとって望ましいものであるため、(B) 行動は増加し、結果的に授業に出席しないことになる。

<パターン②>と<パターン③>は、実際には両者の組み合わせで現れるもので、どちらの比重が大きいかは個人によって異なると考えられる。両者に共通しているのは、出席行動が減少するか、そもそも出席行動をとらないことによって、短期的には望ましくない結果を回避できたり (<パターン②>の場合)、楽しい経験をしたり (<パターン③>の場合) といったメリットを得る一方で、長期的にみると、学業不振に陥るといふデメリットを被ることである。

<パターン③>のみで説明のつく学業不振の学生の場合、そもそも進路変更を勧めるという対応が考えられる。本稿では、支援を受ける者が、在学を継続し単位修得や卒業を目標にしていることを前提に、<パターン②>の場合について議論していくこととした。

<パターン②>を数多く経験すると、次にはその「出席抑制経験」を想起することから出席行動が習慣化しない派生パターンが現れると考えられる。例えば、「出席することで嫌なことが起こるだろう」という思考から、出席を回避するようになる、といった行動傾向である。このように、現実にはまだ起こっていないのに、「悪いことが起こるかも知れない」といった思考や不安 (以後、「予期思考」と呼ぶ) から、すでにそれが現実に行っているかのように錯覚し行動を回避するといったような、「言語事象 (認知、言葉に彩られた感情、記憶、身体反応) の不適切な『行動調節機能』」(MASUDA・武藤, 2011) は、「認知的フュージョン」と呼ばれている。この「予期思考」による「認知的フュージョン」が出席行動の習慣化を妨げて

いる状況を<パターン②'>とする。

### 3.3. 出席促進のための支援の方向性

支援の方向性は、<パターン②>と<パターン②'>それぞれに分けて考えられる。まず、<パターン②>の文脈のセットに変化を与え、出席行動を増やすための方策としては、これまでは出席行動に伴って、望ましくない(C)結果が随伴していたために出席行動が習慣化してこなかったのに対し、支援の中で望ましい結果を随伴させるよう計画することが考えられる。ごく単純化した支援計画は、例えば、出席行動が起こるたびに褒めるということだが、褒めることを、1時限ずつ出席するたびにすることは、支援者側のコストの問題から現実的ではない。そこで本稿では、数週間に1回、継続的に面談を実施し、出席状況を振り返ってもらい、状況が良ければ支援者が褒める、という支援計画をとることとした。この継続的な面談を行うことを前提として、より具体的には次のような関わり方が考えられる。

- ・継続的な面談の中で、支援を受ける者自身の出席率データを確認してもらうように計画し、出席できていることを肯定的に自己評価してもらう。ただし、出席率が思わしくない場合は、出席率をデータとして見せるという結果の提示は、本人にとって望ましくないものである可能性も考えられるので、注意が必要である。

- ・学業不振者は、一般的に過去の出席状況が悪い。面談の中で、支援を受ける学生の出席状況が改善傾向にある場合は、例えば、朝一番の授業に遅れずに出席している工夫を褒める等、過去の出席行動とは異なる行動パターンを実践していることを取り上げ、強調して褒める。

- ・支援を受ける学生が楽しいと思えるような内容を話題として織り交ぜる等して、面談自体をリラックスした雰囲気構成する。これは、学生が面談に来るといふ(B)行動に、本人にとって望ましい(C)結果を随伴させ、面談に来る(B)行動を維持させるためである。面談に来るためには、大学に来なくてはならないので、せつかく大学に来るのならば授業にも出席しよう、という気持ちにさせることも意図している。

- ・反対に、極力控えるべきなのは、面談に来るといふ(B)行動に対し、「叱る」、「諭す」、「説教する」といった、本人にとって望ましくないと思われ(C)結果を随伴させることである。この方針に対しては、学業不振の学生には、指導が必要なのでは、との異論があるだろう。この点について、筆者は、支援を受ける学生の多くは、これま

でも教職員との面談や保証人(親)との話し合いの場で、「叱られる」、「諭される」、「説教される」といった(C)結果を経験してきているのではないかと推察している。「叱られる」といった(C)結果を経験してきながらも、成績低迷の状態が維持されているのであれば、その(C)結果は学業不振を改善する方法としては効果がなかった、と考えられる。そこで、本稿における支援の方向性としては、過去に経験してきたものと異なる(C)結果を提示するために、「叱る」、「諭す」、「説教する」等の対応は、極力行わないこととした。もっとも、支援を受ける学生が過去に支援者からどのような(C)結果を経験してきたかは、個人差があるため、支援の際には、はじめにアセスメントが行われるべきである。

次に<パターン②'>の「予期思考」による「認知的フュージョン」の状態を改善する方策としては、以下のようなことが考えられる。

- ・出席への動機づけを高めることで、予期思考が発生しても望ましい行動を行えるようにする：例えば、単位修得や卒業、さらにその先の就職等、学生の長期的な目標を確認することで動機づけを高め、出席行動を促す。

- ・予期思考の行動への影響を弱める：単位修得は、教員からの評価という自分ではコントロールできない外的要因によって影響を受けるのに対して、出席行動は、支援を受ける学生が自らコントロールすることができる。学業不振の学生は、単位修得に注意が向き、「今学期もまた単位が取れないかも知れない」という予期思考による影響を受けやすいと考えられるが、出席行動は自らコントロールできることを強調することで、予期思考が出席行動に与える影響を弱める。

- ・予期思考はあくまで思考であり、そのような思考を抱えていても望ましい行動を行うことはできることを教示する：例えば、面談の中で、出席が「面倒くさい」、「授業中に眠たくなるだろう」といった思考が出てきた時に、その思考は思考として受け止めながら、「そのように考えること自体は自然なことで、誰にでもわき起こるものだが、それはそれとして出席はしていこうね」といった出席行動を促す声かけをする。

- ・予期思考の元となる出席抑制経験を特定する：過去の出席抑制経験を特定し、今後その経験についての予期思考が起こった場合の対処方法を予め考えておく。

#### 4. 支援対象者と支援方法

##### 4.1. 支援対象者

教学センターでは、X年度春学期、留年生を対象に支援を実施した（以下、「留年生支援」と呼ぶ）。本稿では、学業不振学生として、留年生を取り上げ、この留年生支援で関わった一人の学生の事例について検討する。

##### 4.2. 留年生向けガイダンス（学期始めの時期）

留年生支援の枠組みは、「3-2. 支援の方向性」で示した内容を考慮しながら、学期始めの時期の留年生向けガイダンス（以後、「ガイダンス」と呼ぶ）と、授業期間中の定期的な面談の2段階とした。ガイダンスでは、主に集団講義形式で成績改善のために必要な取り組み方を理論的に説明し、それに続く定期的な面談は、一対一の個別対応を行った。

まず、ガイダンスは筆者が所属する教学セン

ターが主催し、X年度4月初旬に実施した。留年生のうち、一定の成績基準を下回る学生を対象に、保証人（親）への文書通知や、電子掲示板を使用した学生本人への呼びかけを通して参加希望者を募った。スライドを使用して講義形式で説明を行い、説明項目ごとにワークシートを使用した個人ワークに取り組んでもらった。スライド説明、個人ワーク、質疑応答を約1時間で行った。

説明用スライドの作成にあたって、以下の3点をねらいとした。

- [ねらい1] 統計データを通して、出席行動の重要性を実証的に理解してもらう。
- [ねらい2] 出席行動が定着しないメカニズムを理解してもらう。
- [ねらい3] 事例を通し、成績改善学生は出席率も改善していたことを具体的に理解してもらう。

説明用スライドの構成を表1に示した。

表1. 説明用スライドの主な構成内容

説明項目	内容の概略	対応する主なねらい
[S-1] 導入・ガイダンス参加の理由の確認	ガイダンスに参加した理由をワークシートに記入してもらう。ガイダンスに参加した行動を褒める。	
[S-2] 出席の重要性の確認	出席率と修得単位数やGPAに強い関連があることを、グラフを用いるなどして説明する。	[ねらい1]
[S-3] これまで（過去の学期）の出席状況の振り返り	出席を妨げてきた要因について、参加者それぞれにワークシートを使用して振り返ってもらった上で、出席行動が習慣化しないメカニズムを説明する。	[ねらい2] [ねらい4]
[S-4] 出席状況改善事例の紹介	出席が増加し、その結果単位修得状況が改善した事例を紹介する。	[ねらい3]
[S-5] 大学における履修支援の紹介	履修支援を行っている学内部署を紹介する。その中で教学センターでは定期的な面談を行っていることを紹介する。	

表2. ワークシートの主な構成内容

主な質問項目	内容の概略
[W-1] 今学期（春学期）の目標出席率	0～100%の間で記入してもらう。
[W-2] 今後の単位修得（卒業）の重要性	「0：全く重要でない」から「10：とても重要である」の11段階で評価してもらう。
[W-3] 今後の単位修得（卒業）の自信	「0：全く自信がない」から「10：とても自信がある」の11段階で評価してもらう。
[W-4] 出席抑制経験の経験頻度と、それによる出席抑制の程度の評価	19項目について、経験頻度と出席抑制の程度を評価してもらう。

スライド説明の際に特に留意した点は以下の通りである。

[S-1]「導入・ガイダンス参加の理由の確認」では、ガイダンスに参加するに当たって、大学に行くのが「面倒くさい」、「遠い」、「予定の調整が億劫」等、参加を妨げる要因が様々あったであろうことを指摘した上で、参加するという行動を選択してきたことをねぎらい、褒めた。これは、授業期間中にも様々な要因で出席が妨げられる可能性があるが、それにも関わらず出席行動を行うことが重要であることの暗示を意図したものだ。

[S-2]「出席の重要性の確認」では、某年度入学生の1セメスターの成績結果を使用し、出席率と修得単位数の関係をグラフを使用して説明した。これは、修得単位数が多かった学生ほど出席率が良好であったことが折れ線グラフで示されているものである。説明の中で、垂門（2015）の分析結果にも言及し、「自主性」、「意欲」、「持続力」等の心理的指標よりも、出席率が与える影響が非常に大きかったことを指摘した。

[S-3]「これまで（過去の学期）の出席状況の振り返り」では、上記「3-1. 出席行動の習慣化のメカニズム」で説明した内容を図式化するなどして説明した。

[S-4]「出席状況改善事例の紹介」では、出席状況が悪く単位修得が振るわない学期を数学期経験しながらも、在学可能年限に近づくとつれて、改めて卒業を目標に掲げ、授業に出席することで単位修得状況が改善し、卒業に至った留年生の事例を紹介した。その中で、成績不振の状況の中で卒業を目標に掲げるに至った心境や、目標に掲げたものの出席行動を増やす過程で遭遇した、いくつかの出席抑制経験も併せて紹介した。

次に、ガイダンスの中で使用したワークシートについては、A3両面刷りで作成したもので、次の点を主なねらいとした。

[ねらい4] 過去の出席抑制経験を振り返り、特定してもらう。

ワークシートを構成した主な質問項目を表2に示した。

上述 [ねらい4] に対応するために、「[W-4] 出席抑制経験の発生頻度と、それによる出席抑制の程度の評価」を設けた。筆者がこれまで学業不振学生と面談等を行ってきた経験から、出席抑制経験と考えられた19項目を設定（表3）し、まず①それぞれの項目について、経験した頻度を「0:な

かった」、「1:わずかにあった」、「2:時々あった」、「3:よくあった」の4件法で回答してもらった。さらに、②経験したと回答した場合（回答肢「1」「2」「3」の場合）、その経験によって、出席行動がどの程度抑制されたかを、「0:出席/欠席とは無関係だった」、「1:そのためいつも欠席した」、「2:そのためだいたい欠席した」、「3:出席/欠席半々ぐらいだった」、「4:それにも関わらずだいたい出席した」、「5:それにも関わらずいつも出席した」の6肢で回答してもらった。

表3. ワークシートで質問した出席抑制経験19項目

No.	出席抑制経験の内容
1	通学で使う交通機関は混雑していて苦痛だった
2	通学に時間がかかり、苦痛だった
3	友達がおらず、大学に来て楽しくないと思った
4	勉強方法が分からなかった
5	履修科目に興味を持てなかった
6	入学した学部・学科は、自分にあっていなかったと思った
7	授業の内容についていけないと思った
8	シラバスに「定期試験のみで評価」との記載があり、出席しなくても定期試験で頑張れば良かったと思った
9	授業の課題が多く、こなすことができなかった
10	教員の指導方法に馴染めなかった
11	授業期間の前半で欠席がちだったので、今から出席するようになって、単位は取れないと思った
12	大学で学ぶ意義が分からなくなった
13	進路を変更しようと思った
14	進路のことを考えると不安になった
15	友人関係がうまくいっていなかった
16	授業の中で当てられるのを不安に感じた
17	授業に遅刻していくと変なヤツと思われると思った
18	グループワークで自分のことを話すのが嫌だった
19	授業ですでにできあがっているグループの輪に入りづらいと思った

#### 4.3. 定期的な面談（授業期間中）

ガイダンスにおいて、教学センターでの定期的な面談を希望した学生に、主としてその面談日までの出席率の確認を行うことを目的に、週1回または隔週1回の面談を実施した。出席率の確認の他にも、必要に応じて、補足的に生活全般の近況の報告を受けたり、出席行動の重要性を改めて説明したりすることとした。

### 5. 事例検討

この項で検討するのは、筆者がX年度春学期に関わった学生Aの事例である。個人情報をご本稿に記載することについて本人に許可を得た。

#### 5.1. Aの成績状況

Aは文系学部在籍し、筆者との関わりが始まった時点で留年1年目であった。Aの4年次までのセメスタごと出席率と単位修得状況を表4に示した。「単位修得率」は、当該学期の履修登録上限単位数に対する修得単位数の割合である。なお、Aは関わり開始時点までに休学した学期はない。

表4が示すように、1セメスタでは、単位修得状況は比較的良かったが、3セメスタにかけて次第に悪化し、4セメスタでは改善がみられたものの、5～7セメスタでは一桁に落ち込んだ。8セメスタに至っても十分な改善はなく、留年1年目を迎えることとなった。概して出席率に応じて修得単位数が増減している。

4年次終了時点では、卒業要件単位数124単位に対し、Aの通算修得単位数は81、卒業に必要な単位数に対し、不足単位数は43であった。この不足分は、履修登録上限単位数を考慮すると、計算上2学期間すなわち1年間の履修で修得可能な範囲であった。

表4. Aの成績状況の推移

年次	セメスタ	出席率	修得単位数	単位修得率
1	1	87%	19	79%
	2	60%	12	50%
2	3	44%	8	33%
	4	44%	16	67%
3	5	22%	6	25%
	6	14%	2	8%
4	7	26%	8	29%
	8	27%	10	36%

#### 5.2. Aとの関わり開始（4月）

筆者とAとの関わりが始まったのは、4月初旬のガイダンスからであった。Aはガイダンスに参加した約20名のうちのひとりであった。

ワークシートでAは、

- [W-1] 春学期の目標出席率 : 90%
- [W-2] 単位修得（卒業）の重要性 : 10
- [W-3] 単位修得（卒業）の自信 : 3

と回答した。ここからは、単位修得（卒業）については非常に重要と捉えているが、単位を修得していく自信がない心境を読み取ることができた。これは学業不振学生に特徴的な傾向である（中本・垂門, 2015）。

[W-4]「出席抑制経験の経験頻度と、それによる出席抑制の程度の評価」では、経験頻度が最も多い「3:よくあった」と回答し、かつ出席抑制の程度が「1:そのためいつも欠席した」と回答したものは、「履修科目に興味を持てなかった」、「シラバスに『定期試験のみで評価』との記載があり、出席しなくても定期試験で頑張ればいいと思った」、「授業の課題が多く、こなすことができなかった」の3項目であった。

#### 5.3. Aとの定期的な面談の実施（4月～7月）

授業期間中に、教学センターの相談ブースでAと定期的に面談を実施した。面談は全8回であった。実施の時期を表5に示した。「授業消化率」とは、授業開始日から当該面談日までの日数を全授業予定日数で除し、%で表示したものである。8回の平均面談時間は、約35分/回であった。

以下に、各回の面談の様子を記述した。面談実施日に併記して、授業開始から当該面談日までの累積出席率を示した。出席率は、本学の出席確認システムのデータを使用した。面談では、毎回冒頭に累積出席率のデータを筆者より示した。Aはいつもそれをまじまじと見て、それから最近の授業の取組みの話等に移っていった。

表5. 面談回数と実施時期

面談回数	月	週	授業消化率
#1	4月	第4週	14%
#2		第5週	21%
#3	5月	第3週	31%
#4		第4週	38%
#5	6月	第1週	51%
#6		第3週	64%
#7		第5週	78%
#8	7月	第3週	91%

【#1】 4月／第4週（累積出席率：83%）

- ・留年生ガイダンスに参加し定期面談を知った。これまでの修得単位数が少ないのは、大学に来ていなかったため。大学に来ていない時は特に何をするでもなく、だいたい家にいた。
- ・留年が決まったので、親からは「死ぬ気でやれ」と言われた。これまで親は放任主義だったので、こういうことを言われるのは今回が初めてだった。
- ・地元に戻って就職することを考えているが、今学期は就職活動はとりあえず置いておいて、単位修得と卒業を優先するつもり。
- ・高校時代欠席は無かった。勉強はそれなりにやっていた。親から言われてというわけではなく、個人的に真面目に頑張った。
- ・定期面談を継続的にやっていくかどうか、筆者より改めて聞くと、「お願いします」とのこと。
- ・初回は、主に本人のこれまでの修学取組み状況や、現在の就職活動状況、親との関係性をアセスメントする面談となった。

【#2】 4月／第5週（累積出席率：88%）

- ・Aが受講中のいくつかの科目について愚痴をこぼした。例えば、「○○（外国の地域名）の経済で、レポートって、何すか？」（外国のことについて書けるわけがない、との主張であった）、「○○先生は、早口で、声が大きすぎるんすよ。」等であった。それに対し筆者は、ネガティブ志向を売りにしているお笑い芸人のコメントみたいに聞こえる、と感想を述べると、Aは苦笑していた。
- ・筆者より、定期面談では授業に関する話で話したいことは何を話してもよく、リラックスした雰囲気で行っている旨を伝えると、A「そうなんすか？ 何かもっと、ちゃんとしたこと言わなあかんのかなって…」思っていた、とのことだった。筆者より、面談の場では愚痴を言っても良いし、出席に至るまでのしんどかった心境を語ってくれてもよいこと、一方でいろいろと気分が乗らないことがあるだろうが、出席は継続していくことが重要であることを説明した。
- ・授業開始から約1ヵ月経過して、これまで一応出席できているので、今後の出席はもう大丈夫、ゴールデンウィークも乗り切れると思います、との発言があった。

【#3】 5月／第3週（累積出席率：91%）

- ・ゴールデンウィーク前の授業では、風邪をひいて1科目休んだ、との報告があった。また、ゴールデンウィーク中は風邪のため、特別なことは何もしなかったとのこと。
- ・いくつかの科目について、筆者より授業内容に

ついてたずね、本人の回答に対し、重ねて質問する等してディスカッションを行った。

【#4】 5月／第4週（累積出席率：93%）

- ・「今日は、（出席するのが）本当にヤバかったっす。」「行かな、ヤバいな、みたいな」気持ちで乗り切った。今後は、出席は「大丈夫だと思う」とのこと。
- ・最近、授業中は教室の前の方に座っているという。後ろでしゃべっている学生が近頃は「うっとおしい」と感じ、そう感じる自分に対し、「オレ、マジメか！？ みたいになってる」と、前学期までの受講態度とのギャップを苦笑しながら省みる発言があった。
- ・ある科目について、授業終了前にコメントを書いて毎回提出することになっているが、本人の書いたコメントが教員から良い評価を得て、受講生の前で紹介された（教員が読み上げた）との報告があった。「やっぱ、出席、大事だなんて」思う、とのこと。
- ・本人より、今後は、面談の頻度を隔週1回にしたいとの申し出があった。筆者は承諾し、次回は2週間後とした。

【#5】 6月／第1週（累積出席率：90%）

- ・ある2科目の授業の出席について、「ヤバかった」、全体的に「中だるみの時期なので、ヤバい」との発言があった。
- ・ある専門科目で中間テストがあった。論述問題が3問出題された。テストに出るだろうという範囲を予想して勉強して臨んだが予想が外れた。書くことは書いたが、「萎えた」（落ち込んだ：筆者注）とのこと。
- ・課題がいろいろな科目で出題されている。6月末が提出締切のものが多。まだ時間があるので「何とかなるかな」と思うとのこと。
- ・しんどさがたまっているということ、この面談中しきりに訴え、確かに顔色もすぐれない様子だったので、筆者より、授業の履修登録科目数が少ない曜日を選んで1日休んではどうかと提案すると、A「うーん、これは長期休みでしか回復できないすね。夏休みまで待ちます」と、しんどいながらも引き続き授業に出席していく旨の発言があった。

【#6】 6月／第3週（累積出席率：90%）

- ・6月に入ってから何もしたくない感じがある、気持ちが沈んでいる、との発言があった。
- ・授業全般について、「レジュメなんすけど、穴あき（虫食い）のやつが配られることあるじゃないですか。あれ、意味あるんすかね？」と愚痴をこぼした。穴あきの文章に教員の説明を聞いて用語



を記入していくという作業に意味がないという批判であった。

・上述の内容について、これまでも、ほぼ毎回しんどさや愚痴について報告がなされてきており、それと同様の発言であると筆者は受け止め、しんどいと思いつつも出席を継続していることを褒めた。

・筆者より、授業の中で新しくできた友達の有無を尋ねたことから、友人関係と履修登録の話になった。A、留年すると友達がいなくなるために、授業についての情報が入ってこなくなる、留年生同士で集まるような機会があれば参加したい、とのこと。

【#7】 6月／第5週（累積出席率：90%）

・ある科目について、これまで度々愚痴が語られてきたが、先日提出した同科目のレポートは80点だったとの報告があった。それに対し、筆者は驚きと喜びの言葉をかけ、努力を褒めた。本人、出席することによってレポートに書く「ネタ」が分かるため良い結果になった、との発言があった。

・筆者より、履修登録しているいくつかの授業科目の内容を問い、関連するような政治経済分野の時事ニュースについてディスカッションした。

【#8】 7月／第3週（累積出席率：91%）

・数学的知識を要するある科目で、高校数学レベルの知識を必要とする問題が出たが、うろ覚えで自信がなく解けなかった、とのこと。Aがこんな問題だったと示してきたため、筆者も一緒に解き方を悩んだ。

・定期試験期間を目前にし、「論述、書ける気、しないんすよね」といった発言があった。筆者より、先日のレポートでは良い評価を得たこと、それは、出席して、書く「ネタ」を知っていることが大きかったとAが振り返っていたこと、論述試験も同じで、ここまで頑張って、これまでにない出席率で来たこと等を指摘し、きっと大丈夫だろう、と励ました。それに対し、本人「頑張ります」と答えた。

5.4. 支援効果の評価

Aに対する支援効果を評価した（表6）。X-1年度秋学期の出席率は27%であったのに対し、支援後のX年度春学期は90%に改善した。X年度春学期の授業開始直前のガイダンスにおいて、Aは目標出席率を90%と回答していたが、ちょうど目標通りの結果であった。

表6. 支援の効果を検討するための指標

	支援前 評価の時点・基準	支援後 評価の時点・基準
出席率	27% X-1年度秋学期 (単学期)	90% X年度春学期 (単学期)
修得単位数	10 X-1年度秋学期 (単学期)	26 X年度春学期 (単学期)
履修登録上限 単位数に対する 修得単位数 の割合	36% X-1年度秋学期 (単学期)	93% X年度春学期 (単学期)
GPA	0.61 X-1年度秋学期 まで(通算)	2.28 X年度春学期 (単学期)
単位修得の自信 (ガイダンス・ワーク シートより)	3 X年度春学期 開始直前 (0～10で回答)	8 X年度秋学期 開始直前 (0～10で回答)

出席率の改善に伴い、修得単位数は10から26に増加、履修登録上限単位数に対する修得単位数の割合は、36%から93%に増加、GPAは前学期までの通算0.61に対し当学期は2.28に上昇と、成績結果にも顕著な改善がみられた。

AはX年度秋学期始めに開催した留年生ガイダンスにも、春学期に引き続き参加した。その際に春学期に実施したものとほぼ同じワークシートを使用し、単位修得の自信についてたずねた。春学期始めには「3」であった評価が、秋学期始めには「8」まで上昇した（11件法）。このように単位修得の自信にも顕著な改善がみられた。

春学期の成績結果が公表された後、Aに電話連絡したところ、結果に非常に満足している、むしろA自身びっくりしている、「やればできるんすね」との反応だった。

6. 考察

出席促進に焦点を当てて行った、Aへの修学支援について考察した。

・面談における出席率確認の効果

Aは出席率を気かけながら春学期を過ごし、面談において定期的にデータを確認することが、学期当初から常に9割程度の高い出席率を維持してきた理由の一つと考えられる。出席率は、面談に来ずとも、A自身学生個人が閲覧できる専用Web

ページで確認できるようになっているのだが、そのことを A に問うと、出席率を自分以外の誰かと一緒に確認するのが出席の動機づけになるとの回答であった。

・出席することによる学業面の効果

授業期間中、教員に A のコメントシートを他の受講生の前で読み上げられるということがあったり (#4)、授業期間中のレポート課題で高得点を得たり (#7) した。これらは、出席率改善に伴う学業面での効果であると言える。本人にとって、改めて出席行動が重要であることを認識させた出来事であったと思われる。

・受講態度の変化

#4 では、授業中は前の方に座っていることや、教室の後ろでしゃべっている学生をうるさく感じるという発言など、A の受講態度の変化を感じさせる報告がなされた。授業に出席することで、真面目に講義を聞き、単位修得につなげようという気持ちが生まれたと考えられる。

・「認知的フュージョン」について

4 月下旬の #2 面談の際、授業開始後 1 ヶ月経って、高い出席率を維持していたので、今後の出席はもう大丈夫である、との発言があった。しかし、その後も毎回、面談に来るたびに、出席について「やばかったっす」と、出席を抑制する思考等に悩まされたことをうかがわせる発言が続いた。それにも関わらず、その後も 9 割程度の高い出席率を維持した。

このことは、出席が「面倒臭い」とか「眠たいから今日の授業は行かなくてもいいかな」といった思考が起りながらも、思考は思考として切り離し、出席行動を選択し続けてきた結果であり、前学期まで続いてきた「認知的フュージョン」の改善を示唆していると考えられる。

・単位修得の自信について

単位修得の自信について、支援前の春学期の自己評価は「3」であったものが、支援後の秋学期には「8」に上昇した。出席率が改善し、修得単位数が増え、GPA も過去最高を記録した結果が、自信の上昇につながったと考えられる。

## 7. 今後の課題

昨今の学生の多様化を背景に、学業不振学生のタイプも様々である。したがって一つの修学支援策が万能ということはない。また先行研究では、支援の具体策の知見は十分に積み重ねられてきていないという観点から、今後の課題は山積していると言える。ここでは今回の実践を踏まえ以下

に 7 点の課題を指摘した。

・効果的・効率的な支援の検討

支援の効果を高めていくために、支援策のうちどの要素が効果が高かったのか、今後検討が必要である。平均面談時間 35 分/回で、全 8 回の面談を実施した。職員による修学支援策としては、業務の効率性の観点からの検討も必要である。面談時間は 35 分/回でないと効果が出ないのか、より短い面談時間で効果を上げる支援策はないのか、今後、事例を重ねながら検証していきたい。また、今回のような一対一形式ではなく、グループ形式での面談についても検討の余地がある。#6 では、A は留年生同士で集まる機会を希望する発言があったことも踏まえれば、学生によってはグループ形式も成り立つ可能性がある。

・「認知的フュージョン」の変化の測定

留年生ガイダンスでは、出席抑制経験の評価をしてもらった。そうすることによって、「認知的フュージョン」の影響を弱めることをねらったものであった。今回の支援がねらい通りに機能したのかどうかは、より詳しい検証が必要である。具体的には、学期始めの留年生ガイダンスで評価してもらった出席抑制経験について、学期終了時点にも評価してもらい、差異を比較することが考えられる。

・本支援の適用可能な学生タイプの見極め

支援を受ける学生に、「認知的フュージョン」を弱めることをねらった今回の支援が適しているかどうかは見極めが必要である。例えば、大学に来校するにあたって、あまりに強い不安を抱えており、それが出席行動の回避につながっている場合、つまり「認知的フュージョン」の影響が強すぎる場合、面談者が、支援を受ける者の不安や心配をあまり取り上げてくれないと感じ、面談自体を回避してしまうかも知れない。そのような学生には、より丁寧な説明や、別の支援策が必要となると思われる。

・教職協働の支援体制の検討

出席促進支援は、生活のリズムや生活習慣の改善支援であると言える。今回の支援結果は、職員による生活面のみの支援でも成績状況がある程度改善する可能性を示唆している。しかしながら、例えば理系の学部や、文系であってもより技能習熟を重視するような学部の場合、職員のみによる支援では限界があるだろう。その場合は教員や学術的知識を有する専門スタッフによる、学業面での支援が不可欠であると考えられる。また、今回のような支援でも、教員や専門スタッフと協働で支援にあたることで、学業面におけるさらなる改

善につながる可能性も考えられる。

・魅力的な授業づくりによる出席行動の促進

出席が習慣化しない<パターン②>の学生に対応するために最も直接的な支援方法は、学生が出席し受講することで満足感を得られるような授業を作ることである。#4で、授業中Aはコメントシートを教員に読み上げられるという経験をした。コメントシートやレポート等、自分がアウトプットしたものに対する評価をフィードバックするような仕組みは、授業を魅力的なものにしていくための一つの方策であると考えられる。また、学生の授業満足度調査の結果や、授業科目ごとの受講生全体の出席率推移データは、魅力的な授業づくりのための参考指標として活用できると考えられる。

・家族を巻き込んだ支援体制づくり

Aの場合は、家族からの問い合わせ等は一切なかったが、学業不振学生の対応では、本人に加えて家族、特に親も面談を申し込んでくるケースも少なくない。出席行動を促していくために、家族を巻き込んだ支援体制をどのように計画するかは、今後の課題の一つとして指摘しておきたい。

・低年次生への適用可能性の検討

Aは留年1年目の学生であった。同学年の他の学生がおおかたは既に卒業し就職している。多くの留年生はこのことについて強く意識するであろう。これが授業への出席の動機づけの一つになっており、Aが定期面談をドロップアウトすることなく終えたことにつながっていると考えられる。本稿のような学生支援は、早期発見・早期支援が望ましい、つまり低年次のつまずいた学生を早目に支援すべきであると指摘されることが多い。しかし、筆者の経験からは、低年次の学生には、留年生ほど卒業に対する動機づけがみられず、支援をしてもあまり効果が上がらないとか、もしくは途中でドロップアウトする可能性が高い場合が多い。これは、いわば早期支援のジレンマともいえるべきもので、修学支援の分野では大きな課題の一つである。今回と同様の支援が低年次の学生に対しても効果があるのか、検討が必要である。

## 謝辞

本稿の投稿を許可してくださいました、教学センター 小林慎一郎長、水野健児課長、中原正樹課長補佐、英文をみていただいた、ヒューバート先生にお礼申し上げます。ワークシート作成にあたっては、中西勝彦さん、コーオプ教育研究開発センター 大谷麻予さん、学長室 千葉美保子さ

んにご助言をいただきました。ありがとうございます。データや面談内容の掲載にご同意いただいたAさんに感謝します。Aさんに、もっともふさわしい進路がひらけますようにお祈りします。

## 参考文献

- CREAMER, D. G. & CREAMER, E. G. (1994) Practicing Developmental Advising: Theoretical contents and functional applications. *NACADA Journal*, 14: pp.17-24
- HIMES, H. A. (2014) Strengthening academic advising by developing a normative theory. *NACADA Journal*, 34 : pp. 5-15
- 伊藤宏隆, 伊藤圭佑, 舟橋健司, 山本大介, 齋藤彰一, 松尾啓志, 内匠逸 (2014) 学生の修学データを用いた要注意学生の傾向分析. 情報処理学会研究報告 8: pp. 1-8
- 小泉理恵 (2008) 都内大学における「多欠学生」の傾向と取得単位、GPA の関係について——TQM、(総合的品質管理) の視点を用いて——. 目白大学 総合科学研究 4 : pp. 95-105
- MASUDA, A., 武藤崇 (2011) 第6章 ACTにおける精神病理/健康論. 武藤崇 (編) ACTハンドブック 臨床行動分析によるマインドフルなアプローチ. 星和書店 pp.108-109.
- 文部科学省中央教育審議会 (2012) 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～ (答申) pp.4. [http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf) (accessed 2015.10.29)
- NACADA. About NACADA. <https://www.nacada.ksu.edu/About-Us.aspx> (accessed 2015.10.29)
- 中本陵介, 垂門伸幸 (2015) 面談を通して把握した低単位学生の特徴と学業関連領域における支援策実践例——ピア・サポーターを活用した修学支援——. 高等教育フォーラム 5 : pp. 147-157
- 日本高等教育学会第18回大会実行委員会 (2015) 自由研究発表 I I -1 部会 不適応学生. 日本高等教育学会第18回大会発表要旨集録 pp. 28-37
- 小方直幸 (2008) 学生のエンゲージメントと大学教育のアウトカム. 高等教育研究 11: pp. 45-64
- 奥田健次 (2012) メリットの法則——行動分析学・実践編. 集英社
- RAMNERO, J., & TORNEKE, N. (2008) The ABCs of human behavior: Behavioral principles for the practicing clinician. (松見淳子 (監訳) (2009) 臨床行動分析のABC 日本評論社)
- STROMMER, D. W. (1994) Constructing a new paradigm for academic advising. *NACADA Journal* : pp. 14, 92-95.

- 杉山尚子 (2005) 行動分析学入門——人の行動の思いがけない理由. 集英社
- 垂門伸幸 (2015) 修学支援に活用する指標の検討とその活用方法——出席率と GPA の関係に注目して——. 高等教育フォーラム 5 : pp.137-145
- 富田馨 (2015) アカデミックアドバイザーとのインタビュー記録 : 学部生支援の方法を求めて. 教育研究 57 : pp. 201-205

---

## A Case Report of Support for Academically Underachieving Students, Focusing on Attendance Behavior

---

Nobuyuki TAREKADO<sup>1</sup>

As students entering universities have become diversified in many aspects, support for academically underachieving students is considered one of the most important issues. Although a few theories of academic support for students have been suggested so far, the method has not been discussed vigorously. This report focuses on improving attendance behavior in order to raise grades, and initially suggests a method of promoting attendance with consideration of the mechanism of how the habit of attendance is formed in terms of applied behavior analysis. As an orientation to the method, two points are emphasized: 1) making a support plan which brings benefits to students as a result of attendance behavior, and 2) helping students weaken the influence of the thoughts and worries which are likely to cause them to be absent from classes. Secondly, the case of a student repeating the same year is described and the effect of the support is discussed. In this case, as attendance behavior was promoted, the student achieved better grades compared to the previous term. In addition, the level of the student's confidence to get credits in the next term rose.

KEYWORDS: Academically underachieving students, Academic support, Attendance behavior, Grade, Applied behavior analysis

---

2016年1月14日受理

<sup>1</sup> Center for Academic Affairs, Kyoto Sangyo University